

ビリケン是谁が建てたか

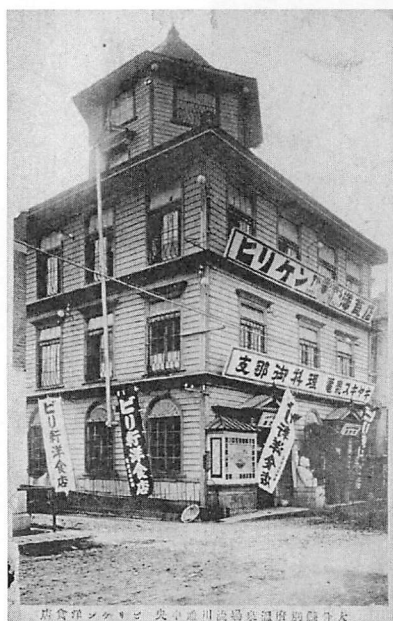
— 昔の流川通りをめぐる物語 —

小野 弘

流川通りのシンボルだったビリケン

戦前の流川通りのシンボルの存在が、とんがり帽子のような展望台を含め四階建ての堂々とした洋風建築物「ビリケン」。佐賀県出身の高木基輔（明治二十一年—昭和二十九年）が経営する洋食店、カフェ、ダンスホールだった。

ところでこの建物は一体いつ、だれが建てたのだろうか。



戦前の流川通りのシンボルの存在だった洋食店ビリケンの絵葉書（のちにはカフェ、ダンスホールもした）

結論から言うと、現在の杵築市出身の中妻三郎（明治二十一年—昭和二十八年）という人物が明治終わりに建てた「中妻三郎商店」が最初だった。では高木がここでビリケン（正式な商号はビリ軒）を開いたのはいつだったのだろうか。大正期の流川通り拡幅のこともからめて、語ってみたい。

拡幅前の絵葉書からわかること

まず大正期の流川通り拡幅・整備の過程を、流川通り三丁目（現在のマルシヨク一帯）あたりを海側に向かって撮影した二枚の絵葉書を比較することで、見ていきたい。

このうち一枚は絵葉書としてはかなり古いもので、大正初期のものと思われる。

画面右側の奥にそびえる建物が「ビリケン」（その当時はビリケンとは呼



拡幅以前の流川通りの様子がわかる絵葉書（大正初期ごろ）

ばれていなかったはずだが)で、現在のマルシヨク流川店東角の位置にあった。

流川通りは大正時代に拡幅され、一直線に整備される。別府を代表する賑やかな大通りに発展していくが、この絵葉書ではまだ道幅が非常に狭く、道筋も海まで突き抜けていない。通りは画面奥で少し左に曲がって海の方へ下っている。

画面奥の、*ペリケン*の前にかすかに見える橋の欄干が、有名な名残橋。遊郭で一晩過ごした客がこの橋で遊女との後朝(きぬぎぬ)の別れを惜しんだということで、「名残橋」と名づけられた。流川自体も「名残川」とも呼ばれ、この絵葉書のタイトルも「名ごり川通」となっている。

川筋は現在のお菓子店の菊家の店舗前で斜めに流れ下っていて、ここに名残橋の名前を刻んだ石が今も保存されている。

柳の木も見える。画面には写っていないが、名残橋より下流は実際に昔ながらに川が流れていたようだ。

画面に写るほかの建物を紹介すると、画面右側の二階建ては手すりに手拭いを干していることからわかるように旅館。日出屋(ひじや)といって別府町長をつとめた植木岸太郎が経営した。画面では見づらいが、一番手前には本格的な上水道が整備される以前の簡易水道もある。

画面左側の石の門柱がある洋館風の二階建ては江口齒科Ⅱ江口航院長は北浜の鶴田齒科医院長鶴田基資氏の祖父に当たる人Ⅱだったこともある建物だが、この時点では看板も出ておらずまだ開業していなかったのかもしれない。ここはのちに朝見病院出張所があった。

少し奥に「湯の花」の看板が見えるのは、湯の花販売や地獄飴の製造販売もした河崎商会。

拡幅の過程を示す絵葉書

もう一枚の絵葉書は、通りの拡幅整備がある程度進んだ時期のもの。一般に絵葉書は何年の撮影か特定が難しいが、実は大正一〇年六月に旅行者が撮影した流川通りの写真があり、情景がほぼ同様であることから、おおまかに言うとその頃だと思われる。

二枚の絵葉書を比較すると、道路整備が進んだことがはっきりとわかり大変興味深い。

前の絵葉書で画面右側にあった日出屋旅館は、大正四年七月末で廃業(※植木岸太郎の息子が杵築中学在学中だった植木忠夫Ⅱのちに富山大学教授Ⅱ)の当時の日記に記されている
—二〇一〇年四月二七日付け今日新聞「懐かしの別府もの

がたり」(九四九回)。その後、道路の拡幅で立ち退きになったものと思われ、姿を消している。

画面中央奥は、通りが海岸まで突き抜けていて、大きく変化している。

画面左側を見ると、前の絵葉書に出てきた河崎商会の湯の花の看板や、二階建ての洋館(電信柱の看板からこの時点では朝見病院出張所になっているようだ)がともに道路から後ろに下がっていることがわかる。流川通りは南側もそうだが、主に北側に道幅が広がったと言われている。建物を土台から移動させる家引きといったやり方で、通りからバックさせたようだ。

たとえば、傘を差して歩く後ろ姿の女性の左側に、建物との間になりのスペースができていますが、これが家を下げたことによってできた空間な



拡幅整備の過程がうかがえる絵葉書 (大正10年前後か)

のだろう。

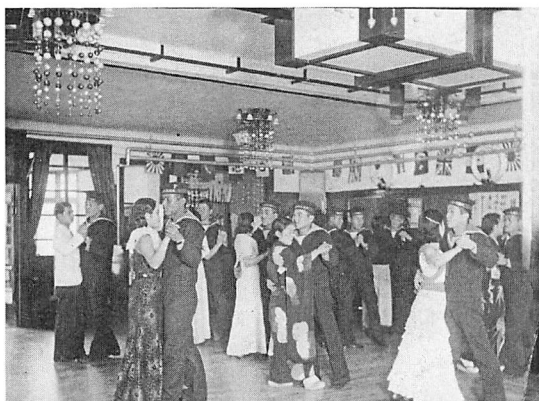
いずれにしても、絵葉書の中で「ピリケン」の建物が見る人の視線を引きつけ、通りの繁栄ぶりを強調する役割を担っていることに気づく。

戦前の別府描いた織田作之助

大阪出身の作家、織田作之助は戦前から戦後まもない昭和二二年に満三三歳で亡くなるまで、デビュー作「夫婦善哉」(昭和一五年)でモデルにした姉山市千代・市次(とらじ)夫婦が別府で商売をしていたため、何回か別府を訪れていたようだ。流川通りを舞台にした「雪の夜」(昭和一六年)、「湯の町」(怖るべき女)(昭和二一年)といった小説を書き、ピリケン(作中では「ピリケン」)を登場させている。

「大晦日に雪が降った。」で始まる「雪の夜」は落ちぶれて大阪から別府に来て易者をしている男が、大阪時代にカフェの女給を争った恋敵にばったり出会う話。ブラジルという喫茶店に誘い、見栄を張ってなけなしの金でコーヒーをおごるという印象的なシーンのある短編で、流川通りは次のように描写されている。

「さすがに流川通である。雪の下は都会めかしたアスファ



ビリケンのダンスホールで
ダンサーとステップを踏む海軍の兵隊たち

ルトで、その上を昼間は走る亀ノ井バスの女車掌が言うとお
り『別府の道頓堀でございます』から、土産物屋、洋品屋、
飲食店など殆んど軒並みに皓々と明るかった。／その明りが
あるから、蠟燭も電池も要らぬ。カフェ・ビリケンの前にひ
とり、易者が出ていた。(中略)／だが、ビリケンの三階に
ある舞踏場でも休みなしに蓄音機を鳴らしていた。が、通に
ひとけが少いせいか、かえってひっそりと聴えた。ここにも
客はなかつたのである。(中略)／ひと頃上海くずれもいて
十五人の踊子が、だんだん減り、いまの三人は土地の者ばか

りである。』(※イン
ターネットの「青空
文庫」より)

夜も皓々と商店の
明かりが続く流川通
りを、大阪の道頓堀
とだぶらせて、親近
感を持つて眺めてい
たのだろう。ただ、
ビリケンのダンス
ホールに一五人もい

た踊り子がたった三人にまで減ったというエピソードは実際
の出来事だったと思われ、戦時下の緊迫した時代の空気を感
じさせる。

戦後発表された「湯の町」の冒頭にもビリケンのダンスホー
ルが登場する。

「流川通を真っ直ぐ海岸の方へ、自動車は真昼のように明
るい街の灯の中を走って行った。／流川通は別府温泉場の道
頓堀だ。カフェ、喫茶店、別府絞り・竹細工などの土産物屋、
旅館、レストランが雑然と軒をならべ、そしてレストラン
トの三階にはダンスホールがあった。妖しく組み合った姿が
窓に影を落して蠢いていた。もつとも、それは車の中にいる
雄吉には見えなかつたが、ジャズの音は聴えた。」(平成六年
ぎょうせい「ふるさと文学館第五一卷大分」より)

同じく戦後に発表された「怖るべき女」は、京子という娘
の奔放な性を描いた小説。「カフェ『ビリケン』の前を通ると、
タンゴバンドの音が聴えて来た。ビリケンの三階はダンス
ホールだった。ホールの窓を明けはなしてゐるので、流川通
から、胸と胸をびたりとつけて、踊ってゐる幾組かの男女の
姿が、影絵のやうに妖しく蠢めいて見えてゐた。」(昭和二三
年実業之日本社「怖るべき女」より)と書かれ、流川通りや

ビリケン は繁栄の場としてだけでなく、猥雑な空気が漂う享楽の場として表現されていることもうかがえる。

苦勞して西洋料理店開いた高木基輔

織田作之助が描いたのは、昭和一〇年代のビリケンだが、昭和一二年「別府案内」の広告を見ると、一階が「高級大衆食堂部」、二階が「歓楽の殿堂・夜の酒場」でカフェ、三階が「ダンスホール部」となっている。

経営者の高木基輔のプロフィールは昭和一〇年「大別府人物史」に、裸一貫から成功を収めた「立志伝の人」としてかなり詳しく紹介されている。

佐賀県小城郡牛津町（現在の小城市）の貧しい農家の長男だったが、青雲の志をいただき、海軍御用船玄海丸の厨房で働



ビリケンの経営者高木基輔
（昭和8年）

き、次に日本郵船・立神丸に二等料理人として乗り組んで洋食の腕を磨いて一

等料理人になった。外国航路の船に乗り欧米も見知っていた。

別府に來たのは大正二年。現在の明豊中学高校の位置にあった別府ホテルの料理主任として招聘されて船を下りた。翌三年に独立して西洋料理店「ビリ軒」を開いたようだが、店の位置は流川通りを転々とした。開業資金もわずか、店のしつらえも粗末で、ずいぶん苦勞したことが記されている。

高木のビリケン営業は大正八年か

高木がビリケンの建物で営業したのがいつからなのだろうか、実ははっきりとはわからない。

「大別府人物史」では、高木が成功を収めて現在の建物（つまりビリケン）で開業することができたのを大正一五年としている。洋食部のほかにホテル部門も開設したが、昭和八年に廃止してダンスホールにした。

ところが戸籍によると、高木は大正一二年七月三十一日にビリケンの位置に転籍しているので、それ以前であることは間違いない、またビリケンの写真の中に、「大正八年三月」と添え書きがあるものがあり、もしかしたら大正八年頃かもしれないが、現時点でははっきりしない。

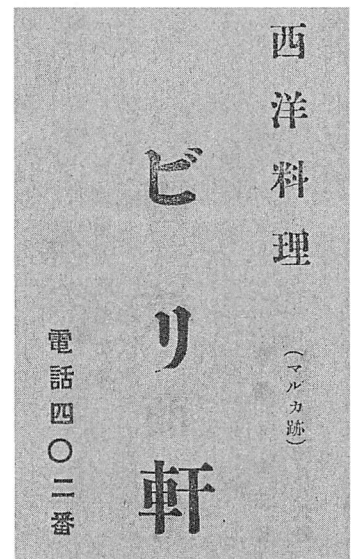
大正四年はマルカ跡で洋食店

大正四年「通俗別府温泉案内」には「ビリ軒」の広告が掲載されている。この広告には小さく「(マルカ跡)」と店舗の位置が記されている。

マルカとは、流川通りの桜町通り入口から東側一帯に昔あった大きな料亭で、史談会会員の衛藤秀子さんの実家、藤岡商会（現在は中心市街地活性化事業のプラットフォーム03）から山正かご店にまたがる広い敷地だった。

大正四年の時点では、まだ洋食店ビリ軒はその位置で営業していたことがわかる。

なお、マルカといえば、昭和一六年に出版された徳田秋声の自伝的小説「西の旅」にも登場する。秋声がまだ若い頃、明治三六年の別府滞在の話で、劇場松涛館の木元トミと、先妻の子供たちであるキヌ、タル、ハナの姉妹のうち「お絹さん」の人物名でタルも登場するなど、おそらく実際にあつたことをそのまま書き記していると思われる、大変に興味深い。また、昭和八年「別府市誌」の会社一覧の中に、合資会社としてビリケン食堂が掲載されており、創立年月日が昭和三年一二月となっているのは、あくまで合資会社の形態にした年という意味で開業年ではない。



大正4年「通俗別府温泉案内」に掲載された「ビリ軒」の広告には所在地が「マルカ跡」と小さく書かれている

高木基輔自身が昭和一九年に記したメモがあり、それでは、家業を「西洋料理店」、商号を「ビリ軒」とし、開業を「大正二年四月一日」としている（「大別府人物史」とは若干食い違う）。

さらにメモでは営業科目として西洋料理業、セントラルホテル業、ダンスホール業、カフェー業、食堂業の五つを上げ、「上記各種業務大正二年四月一日ヨリ昭和十九年三月五日迄継続中各種二渡ル」と記している。

ちなみにビリケンの建物は戦後は、吉村薬品が購入して使っていた。

塩田経営し別府に移った中妻家

さて、中妻家は別府の歴史の中にこれまでほとんど登場し



中妻弥七が経営した楠町の寄席「なの字館」

てきていない。近代史のバイブル的存在になっている「別府今昔」（昭和四一年、是永勉著）でも、水道敷設の話題で水道委員の名前を列挙した中に、中妻佐作の名前が出てくるだけだ。

ビリケンのことを少し置いて、楠町に戦前なの字館という寄席（戦後はスバル座というストリップ劇場にもなった場所で、今は協栄コートというビルの一部になっている）があったことはよく知られている。

ビリケンのすぐ裏手にあった料亭なの字本家を兄の中妻佐作が経営し、弟の弥七がなの字館を経営した。そのため、料

亭のほうを「旧なの字」、なの字館のほうを「新なの字」とも呼んだ。もちろんなの字とは中妻の「な」のこと。

中妻佐作はすでに、明治二十一年「別府温泉記」に「旅籠屋並びに貸座敷／楠浜／豊後屋／中妻佐作」とあり、早くから別府に来ていたことがわかる。明治四五年から四年間、別府町の町会議員をつとめ、弟の弥七も大正五年から町会議員になっていて、実力者の兄弟だった。

中妻家は杵築の町から国東よりの大内という所で、塩田を経営して大成功を収めた。そういう資金の背景があったから別府で旅館や寄席を営むことができたと思われる。

国の専売制度が始まり、明治末に塩田整理が行われたため、佐作、弥七の姉であるシマ夫婦と家を嗣いでいた長男豊も別府に移り住み、家は亀の井ホテルの向かい側にあった。

本題の中妻三郎はシマ夫婦の次男だが、佐作の養子に入った。土地台帳では、ビリケンの位置（三四〇番地）も裏手のなの字本家の場所も、明治二〇年代から中妻佐作の名義になっている。

ビリケンの土地は、明治三四年に佐作からシマの名義に、さらに大正九年に三郎の名義に移っているが、長い間中妻家の所有だったわけだ。

「ビリケン」を建てた中妻三郎

中妻三郎については大正六年の「大分県人名辞書」と、昭和一〇年「大別府人物史」に経歴が掲載されているが、杵築中学、神戸高商卒の優秀な人物で、豪商鈴木商店の上海支店に勤めた。大分県人名辞書では、大正元年に帰朝して雑貨店を開いたとあり、「店舗壮麗（洋風四階建）、町の一偉観たり」という言葉が記されている。

この雑貨店、つまり中妻三郎商店の広告が大正四年「通俗別府温泉案内」に掲載されている。中妻三郎商店が大正四年の時点でたしかに存在したことがわかり、同時に店舗が洋風四階建てで、しかも非常に目立つ建物だと書かれているわけで、これらのことからビリケンを建てたのが、中妻三郎だと推測できる。ただし商売のほうはうまくいかなかったようだ。

中妻三郎は大分商業で教鞭を執ったり、別府実業学校及び商業補修学校を創立してその校長となったり、大阪で杵築出身の一松弁護士と組んで税理士をやったこともあったようだ。昭和六年から七年まで大



中妻三郎

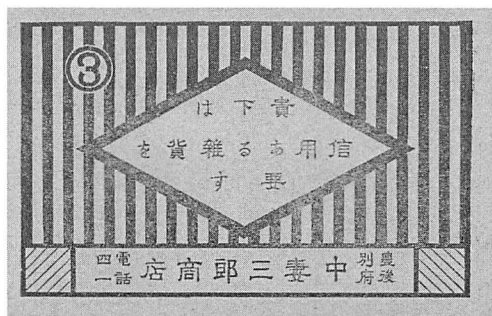
阪神戸経理所を経営したとも書かれている。養父佐作が死

んだため、別府に戻って料亭などの字本家を継ぎ、別府料理屋組合副組合長もつとめたが、やはり自分の性に合わないと大陸に渡って牡丹江木材副社長でジャンク（木造帆船）を作って活躍した。戦後は福岡に引き上げて亡くなった。

明治四五年頃の建設が判明

さて、結論に入りたい。史談会の後藤重巳会長のお世話で以前筆者が見ることができた、別府大学附属博物館（アーカイブズセンター）所蔵の「大分区裁判所別府出張所図面綴込帳」という古い書類綴りがある。登記のためと思われるが、明治四四年一月から大正二年二月までの間に提出された住宅や旅館などのごく簡単な図面約五〇〇件が収められている。

この中に中妻三郎が提出した図面がある。提出者や日時「明治四十五年一月十日、東国東郡大内村二の百七十九番地

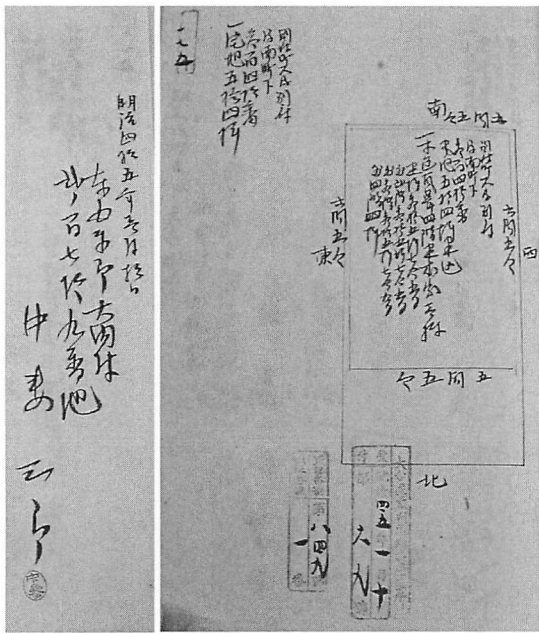


大正4年「通俗別府温泉案内」に掲載された「中妻三郎商店」の広告

中妻三郎」となっており、図面のほうには「別府町大字別府字南町下参百四拾番」(二三四〇番)とあって、ビリケンの場所。

建物については「木造瓦葺四階建本家壹棟」とあり、四階建てというと、まさにビリケンのことを指している。

この図面のおかげで、明治四五年一月前後に中妻三郎がビリケン(ビリケンという名前ではなく、中妻三郎商店だった)を建てたことが明らかになった。



明治45年1月付けで中妻三郎が提出した“ビリケン”の建物の図面=別府大学附属博物館(アーカイブズセンター)所蔵の「大分区裁判所別府出張所図面綴込帳」より

※写真や情報を提供いただいた高木家、中妻家のみなさん、後藤重巳会長、別府大学、そのほかご教示をいただいたみなさんに感謝します。